

早生～中早生品種を使った エダマメの抑制栽培(10～11月出荷)

雪印種苗(株)
園芸作物研究グループ
野菜研究チーム 主任 本多 範久

1. エダマメの抑制栽培とは

10月に店頭と並んでいる秋のエダマメは、中晩生や晩生の品種を利用し、90日以上の日数をかけて栽培するものが一般的でした。今回、ご紹介する10～11月出荷(遅出し)のエダマメは、春播きの栽培期間が80～85日の早生や中早生の品種を利用しますが、夏播きすることで「60～65日」と約2か月で収穫が可能になります。

昨今の異常気象により、夏播きの葉物が作りにくくなっていること、秋冬野菜を作付する前の一作を探している場合に、約2か月で収穫できるエダマメの抑制栽培は魅力的と言えます。また、10月から11月に収穫するエダマメは、昼夜の温度差により、夏どりに比べて非常に糖度が高くおいしいエダマメが収穫できます。

一方、抑制栽培については、春播きの栽培とは少々異なる品種の特性と栽培のポイントがあります。早生や中早生品種の多くは、気温が高い(7～8月播き)と早く花を咲かせる特性をもち、節数は変わりませんが、節間が詰まり、コンパクトな草姿になります。

節間が詰まることで春播きの栽培より着莢数は減りますが、反当たりの株数を多く(密植栽培)することによって収量を確保することができます。以下に、抑制栽培の方法と注意点について解説します。

2. 抑制栽培の方法と注意点

①施肥量は露地栽培で10aあたりN:P:K=2～3:10:8(kg)、ハウス栽培(特に束出荷)では、N:P:K

=1～2:8:6(kg)と春作の7割程度を基準として、地力や前作などを考慮して加減します。

②播種期

(高冷地の場合)ハウス栽培は、8月上旬～8月下旬播きで、10月上旬～10月下旬収穫。露地・露地マルチの栽培では、7月下旬～8月中旬播きで、9月下旬～10月中旬収穫になります。

(一般地・暖地の場合)ハウス栽培は、8月中旬～9月中旬播きで、10月中旬～11月中旬収穫。露地・露地マルチの栽培では、8月上旬～8月下旬播きで、10月上旬～10月下旬収穫になります。

※無理な遅まきは、生育後半の低温によって莢が膨らまないこともあり、注意が必要です。また、地域によって

は、生育後半の低温のため、トンネル被覆が必要になります。

③エダマメの出荷体系は、「もぎ出荷」「切り枝出荷」「束出荷」と大きく3つに分けられますが、それぞれ出荷に応じた栽植密度があります。

●もぎ出荷の場合:「9215、9220(95cm幅、2条、株間15、20cm)」を利用し、8月中旬までは「白黒ダブルマルチの白」、それ以降は「黒マルチ」が適します。マルチ無しの露地栽培の場合、株間を15cmにします。

●切り枝出荷の場合:「3430(135cm幅、4条、株間30cm)」「3324(135cm幅、3条、株間24cm)」を利用し、8月中旬までは「白黒ダブルマルチの白」、それ以降は「黒マルチ」が適します。



▲【もぎ出荷】 莢音(さやね) サヤムスメ
8月12日播種(露地:9220マルチ、直播)

●束出荷の場合：「3615（135cm幅、6条、株間15cm）」や「3415（135cm幅、4条、株間15cm）」を利用し、8月中旬までは「白黒ダブルマルチの白」、それ以降は「黒マルチ」が適します。

④収量性の確保と労力の問題から直播が基本となります。播種前に十分灌水し、落ち着いたところでマルチを張ります。高温時期の播種になるため、深播きすると、マルチ内の熱で煮えてしまい発芽不良になります。通常より浅く播くことにより、発芽不良を抑えることができます。マルチをしない露地栽培も可能ですが、その場合、雑草防除が重要になります。2粒播きした後、間引きをして1本立てにします。

⑤種子は直播きをお勧めしますが、猛暑年では、直播きでは発芽不良になることもあり、移植栽培の方が良い場合があります。種を床播きした後、支柱を立て、「すだれ」や「黒寒冷紗」をかけて地温を下げると発芽が揃います。その後、初生葉が展開する前（若苗）に移植しますが、その場合、気温・地温の下がる夕方に移植を行い、散水を必ず行います。散水には動噴を利用するか、散水設備が整った畑を準備します。また、労力の軽減のため、家近くの散水しやすい畑を選定することがポイントになります。定植後、必要に応じて、2～3度散水し、根の活着を促します。

⑥露地の播種後や定植後は、サンサン

ネット等の寒冷紗資材や鳥よけを利用し、病虫害防除、鳥害防除、風よけを行います。播種後、約30日で開花しますが、開花初期に干ばつによる乾燥によって着莢不良にならないよう、葉水を与えるか、弊社植物活力資材ジャックスパワーの散布が効果的です。ハウス栽培においては、ダニ、スリップス、コナジラミの被害に注意し、防除の徹底を図ります。

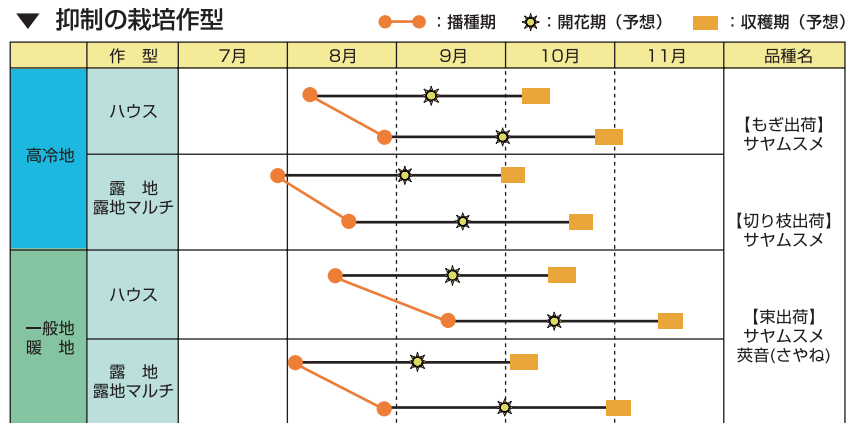
⑦11月出荷の場合、地域によっては生育後半の寒さが厳しく、低温対策が必要な場合があります。莢を膨らませるため、10月中旬から穴あきのフィルムを利用したトンネル被覆を行います。

⑧播種後、60～65日で適期が来るので、適期収穫を心掛けます。



▲【束だし出荷】 サヤムスメ
8月17日播種（ハウス：3415マルチ、移植）

▼ 抑制の栽培作型



3. 抑制栽培に向く品種について

エダマメの生産地である関東や東海地方で、抑制栽培の取り組み、出荷が行われていますが、「もぎ出荷」や「切り枝出荷」では『サヤムスメ』、「束出し出荷」では『英音（さやね）』『サヤムスメ』をご利用頂いております。抑制栽培に向く品種は、多々ある品種の中でも幾つもあります。多くの品種は莢の肥大期の低温と短日による日射量の減少により、莢色が極めて淡くなり、品種によっては紫色（アントシアン）が発生します。また、小莢になるものや、莢だけが大きくなり豆が太らない（ブカ莢）現象がおこります。その中で、春播きでご利用頂いている極大莢、極濃緑の『サヤムスメ』と『英音』においては、春播き同様の莢の形状と実入りで、抑制栽培にも向く多収の品種です。形状もさることながら、秋の低温と昼夜の温度差による甘み、旨みにより、とても美味しいエダマメを収穫することができます。

今後、広がりを見せられるエダマメの抑制栽培を一度試して頂き、甘くて美味しいエダマメを多くの方に食して頂くことを願っております。